



## 第164回研修会 「ふるきよきものの伝承」 (その26)

2019年7月15日(月祝)～7月16日(火)

失われつつある  
日本の精神文化を求めて



世界文化遺産「尚古集成館」の前で

### 偉人のふるさとを訪ねて(鹿児島編)

なりあきら

## 薩摩藩主・島津斉彬と

## 薩摩藩のリーダー西郷隆盛

今回は、さまざまな産業と人材を育て、日本の近代化に尽力した薩摩藩主・島津斉彬の足跡と、斉彬に影響を受け、リーダーとして薩摩藩を率いた西郷隆盛のふるさと、鹿児島県を巡りました。



仙巖園の御殿

「仙巖園」は島津家の別邸として、江戸時代初期の万治元年(1658年)に島津家19代当主・島津光久によって築かれました。この庭園には中国や琉球文化の影響が随所に見られ、「南の玄関口」として海外との交易を盛に行った薩摩藩の歴史をうかがい知ることが出来ます。桜島を築山に、錦江湾を池に見立てて借景した雄大な眺めは、とびきり美しいもの。国の名勝にも指定され、多くの観光客が訪れる場所となっています。

### 仙巖園

空路を経て一行が降り立ったのは、明治維新萌芽の地のひとつ、鹿児島。外様大名の島津家が治めた薩摩藩は、火山噴火などの災害が多く、稲作にも適さず、財政は長らくひっ迫していたといえます。そんなこの地を、島津家はいかに守り立てたのか——それを知るべく、一行はまず「仙巖園」へと向かいます。

一行は、西郷隆盛の遺品や功績が展示される「西郷南洲顕彰館」と、西郷や、ともに戦った将士たちが眠る「南洲墓地」を訪ねます。下級藩士ながら薩摩藩主・島津斉彬に見出され、薩摩藩のリーダーとして薩長同盟をまとめあげ、明治維新を導く風雲児となった西郷。情に厚く、多くの人に慕

### 西郷南洲顕彰館



仙巖園から噴煙を上げる桜島を望む



美しく雄大な庭園

続いて鹿児島港からフェリーに乗り、桜島へ。錦江湾にそびえ立つ「桜島火山」は、鹿児島を代表するシンボルの一つです。有史以来、頻繁に噴火を繰り返してきたことから、活火山と都市の共生の象徴

### 「桜島」と「薩摩富士(開聞岳)」



2,023名の将士が眠る南洲墓地



学芸員の講話に耳を傾ける参加者

われながら西南戦争で没した英雄に思いを馳せる時間となりました。

にもなっています。

また二日目の朝、宿泊先の指宿温泉を出発したバスの車窓からは、もうひとつの鹿児島島のシンボル、薩摩富士と「開聞岳」が望めます。鹿児島島のスケールの大きな自然に触れながら、指宿から30kmほど北にある「知覧武家屋敷庭園」へ向かいました。



バスの車窓から開聞岳を眺める

### 知覧武家屋敷庭園

「4人に1人が武士」といわれるほど人口に占める武士の割合が高かった薩摩藩では、武家を城下町に集約させるのではなく、領内113地区に分散して居住させる「外城」という仕組みを用いて、藩を効率的に統治しました。

現在も「外城」の姿が残されている「知覧麓の武家屋敷群」は美

しい庭園、整った石垣や生け垣、洗練された町並みから「薩摩の小京都」と称されています。一行は、端正な町並みに漂う江戸風情を目で楽しんでいました。



歴史と伝統を今に伝える「薩摩の小京都」こと知覧



江戸の風情が残る家屋

### 維新ふるさと館

その後、鹿児島市中心部に戻った一行は、明治維新の原動力となった偉人への理解を深めるため「維新ふるさと館」へ足を運びます。映

像やゲームなど多彩な展示が設けられている同館。等身大ロボットが演じる臨場感あふれるドラマ『維新への道』などを観賞し、幕末から明治に至る維新の道のりを、より身近にイメージしました。



維新ふるさと館内の展示物



同館の維新体感ホールで『維新への道』を鑑賞

### 照国神社

薩摩藩主の座に就き50歳で急逝するまでの7年間、斉彬は藩の近代化とともに、西郷や大久保利通らの登用・育成を手がけ、薩摩藩が

明治維新の一翼を担う礎を築きました。没後は「照国大明神」として照国神社に祀られ、今も鹿児島島の地を見守っています。

一行が訪れた7月16日は、ちょうど「照国神社 六月燈」の日。境内には奉納された色鮮やかな灯籠が並んでいました。六月燈は、鹿児島島の寺社では広く行われている行事ですが、照国神社の六月燈が最も賑わいを見せるそう。ここに並ぶ灯籠に、一斉に灯が灯されたらどんなに感動的なものか——そんな感慨に後ろ髪を引かれながら一行は帰路に就き、薩摩の偉人のふるさとを巡る旅を締めくくりました。



照国神社の境内にある島津斉彬像



八の字にくぐると願いが叶うそう

### 薩摩藩ゆかりの世界遺産



薩摩藩の藩政近代化の足跡である「仙巖園の反射炉跡」・尚古集成館「異人館」は、世界遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成遺産となっています。

薩摩藩は、当時支配下に置いていた琉球にしきりに異国船が来航する状況を知り、ヨーロッパ諸国のアジア進出を機敏に察知。危機感を抱いた斉彬の発案のもと、製鉄・造船・紡績などの近代工業化を推進する「集成館事業」に着手しました。この事業を通じて蓄積した経験は、やがて幕末・明治期の日本の近代化に大いに寄与します。



異人館 (旧鹿児島紡績所技師館)

反射炉跡

尚古集成館